

2026
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

200点／90分

第4問 次の【文章Ⅰ】は、平安時代末期から鎌倉時代初期の頃に成立した『古本説話集』の一節で、平安時代前期の歌人平

貞文（本文では「平中」）に関する逸話である。【文章Ⅱ】は、平安時代中期に成立した『源氏物語』の一節で、主人公の光源

氏が幼かった頃の紫の上（本文では「姫君」）と一緒に絵を描く場面である。これらを読んで、後の問い（問1～3）に答えよ。
なお、設問の都合で【文章Ⅰ】の本文の段落に①・②の番号を付してある。（配点 45）

【文章Ⅰ】

①今は昔、平中といふ色好みの、いみじく思ふ女の若くうつくしかりけるを、妻の許に率て来て置きたり。妻、にくげなる事どもを言ひつづくるに、追ひ出だしけり。この妻に従ひて、「いみじううたし」とは思ひながら、え止めず。いちはやく言ひければ、近くだにもえ寄らで、四尺の屏風に押しかかりて立てり。「世の中の思ひのほかにてあること。いかにしてもものし給ふとも、忘れて消息もし給へ。おのれもさなむ思ふに」など言ひけり。この女は包みなどに物入れしたためて、車とりによりて待つほどなり。「いとあはれ」と思ひけり。さて出でにけり。とばかりありておこせたる、

a 忘らるな忘れやしめる春霞けさ立ちながら契りつること

②この平中、さしも心に入らぬ女の許にても、泣かれぬ音を、そら泣きをし、涙に濡らさむ料に、硯瓶に水を入れて緒をつけ、肘に懸けてし歩きつ、顔、袖を濡らしけり。出居の方を、妻、のぞきて見れば、間木に物をさし置きけるを、出でて後、取り下ろして見れば、硯瓶なり。また、畳紙に丁子入りたり。瓶の水をいうて、墨を濃くすりて入れつ。鼠の物をとり集めて丁子に入れ替へつ。さてもとの様に置きつ。例の事なれば、夕さは出でぬ。暁に帰りて、心地悪しげにて唾を吐き、臥したり。「畳紙の物の故なめり」と妻は聞き臥したり。夜明けて見れば、袖に墨ゆゆしげにつきたり。鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり。硯瓶を見れば、墨をすりて入れたり。畳紙に鼠の物入りたり。いといとあさましく心憂くて、その後、そら泣きの涙、丁子を含むこと、止めてけるとぞ。

(注) 1 四尺の屏風——「四尺」は約一二センチメートル。「屏風」は室内に立てて、物を隔てたり、風を防いだりする家具。

2 硯瓶——硯に注ぐ水を入れる器。

3 つ——ここでは、接続助詞「て」と同じ意味。

4 出居——客間。客との応接に使用する部屋。

5 間木——高い所に設置された棚。

6 畳紙——紙を折り畳んだもので、貴族たちはこれを懐に入れて携帯する。

7 丁子——フトモモ科の常緑樹で娯薬の一種。口臭消しとして口に含んだ。

8 いうてて——注ぎ捨てて。

9 鼠の物——ここでは、鼠の糞のこと。

【文章Ⅱ】

絵など描きて色どり給ふ。よろづにをかしうさび散らし給ひけり。我も描き添へ給ふ。髪いと長き女を描き給ひて、鼻に紅^{べに}をつけて見給ふに、絵に描きても見まうきさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いと清らなるを見給ひて、手づからこの紅花^{あかばな}を描きつけ、にははして見給ふに、かくよき顔だに、^(注10) さて混じれらむは見苦しかるべかりけり。姫君、見ていみじく笑ひ給ふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「^(ウ) うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやふく思ひ給へり。そら拭^{ぬぐ}ひをして、「さらにこそ白まね。用なきささびわざなりや。内裏^{うち}にいかのたまはむとすらむ」と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思^{おも}ひて、寄りて拭ひ給へば、「平中がやうに色どり添へ給ふな。赤からむはあへなむ」と戯^{たは}れ給ふさま、いとをかしき妹背^{いもせ}と見え給へり。

(注) 10 紅花——紅花^{べにばな}からとった染料で絵具にも用いる。「赤鼻」と掛けている。

11 内裏——ここでは、帝のこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

24
26

(ア) いみじうらうたし

- 24
- ① たいそう美しい
 - ② とてもいじらしい
 - ③ 不快で苛立^{いらだ}たしい
 - ④ ひどくみじめだ

(イ) 心憂^{こころ}くて

- 25
- ① 悲しくて
 - ② 憂鬱^{ゆううつ}になって
 - ③ 情けなくて
 - ④ 悔しくて

(ウ) うたてこそあらめ

- 26
- ① いやだろう
 - ② どうにでもなれ
 - ③ 笑われそうだ
 - ④ 疑わしい

問2 波線部a～eについて、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番

号は 27。

- ① a 「忘るるな」の「な」は詠嘆の終助詞で、若い女が平中に捨てられた自分の身の上を嘆いていることを表している。
- ② b 「畳紙の物の故なめり」の「な」は推定の助動詞で、平中の苦しむ声を聞いて、その原因を妻が推測する様子を表している。
- ③ c 「さて混じれらむ」の「らむ」は現在推量の助動詞で、源氏が今まさに赤い色の付いた自分の鼻を見ている様子を表している。
- ④ d 「思ひ給へり」の「給へ」は下二段活用の謙讓の補助動詞で、作者から源氏に対する敬意を表している。
- ⑤ e 「さらにこそ白まね」の「ね」は打消の助動詞で、鼻に付いた色がまったく取れないと源氏が大げさに言ったことを表している。

問3 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師——どちらの文章にも登場する平中というのは色好みで有名な男性ですが、平中についてより深く理解するために、次の文章を読んでみましょう。これは平安時代末期に書かれた『源氏釈』という『源氏物語』の注釈書の一節で、【文章Ⅱ】について記しています。女君とあるのは若い頃の紫の上のことです。

女君に、鼻に紅つけて見る所に、御硯の瓶の水に紙を濡らして拭ひ給ひて、平中がやうに色どり添へ給ふ所、平中が見る女ごとに泣くよし見せむとて、硯の瓶に水を入れて目を濡らしけるを、女、心得て、その瓶に墨を入れたりけるを、知らで例のやうに顔にして帰りたるを見て、
我にこそつらさを君はみすれども人にすみつく顔のけしきよ

教師——『源氏釈』の内容は、【文章Ⅰ】の②段落に対応しています。『古本説話集』も『源氏釈』も『源氏物語』以降の成立ですが、平中に関する話が『源氏物語』の書かれた時には広く流布していたのでしょうね。

生徒A——ですが、『源氏釈』と【文章Ⅰ】の②段落とは違う点もありますよ。例えば「我にこそ」の和歌は『古本説話集』にはありません。ところでこの和歌はどんな意味なのでしょう。

教師——前に授業で取り上げた「掛詞」に注目してみるとよいですよ。

生徒B——掛詞は一つの言葉に二つの意味を持たせる技法でしたよね。そうか、この和歌は、**X**を詠んでいると考え

られます。

教師——その解釈でよいでしょう。内容から見ても、【文章Ⅰ】の結末にあってもおかしくない和歌なので、何らかの理由で脱落したものと思われます。

生徒C——今、思い出したのですが、以前、どこかで【文章Ⅰ】の①段落の話を讀んだ気がします。

教師——よく勉強していますね。たしかに、歌物語の『大和物語』には【文章Ⅰ】の①段落の内容だけが載っています。では、②段落があることで【文章Ⅰ】で描かれている内容は、どのようになりますか。

生徒D——そうか、②段落があることで、**Y**と言えるのではないのでしょうか。

生徒E——そうすると、当時流布していた平中の逸話を前提として書かれた【文章Ⅱ】の「平中がやうに色どり添へ給ふな。赤からむはあへなむ」は、**Z**ということですね。

教師——そうです。当時の読者たちは、他の作品の引用があることによって、物語の場面や心情をより深く理解していたのでしょうかね。

(i) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は **28**。

① 「けしき」に「怪^けしき」と「気色^{けしき}」を掛けて、あなたが浮気をしているのではないかと怪しんでいたが、それが態度にもはつきり表れたと、平中に腹を立てる気持ち

② 「すみつく」に「住^すみ着く」と「墨付^{すみ}く」を掛けて、他の女の所に通っていることが墨の付いたあなたの顔でよくわかったと、浮気な平中を嘲^{あざけ}る気持ち

③ 「けしき」に「異^けしき」と「気色」を掛けて、帰宅した様子がいつもとまったく違っていたことで他の女に情を移したのがわかったと、平中の心変わりを嘆く気持ち

④ 「すみつく」に「澄^すみ尽く」と「墨付く」を掛けて、どんなにすました顔をしていても墨を付けたあなたの顔から浮気は明らかだと、平中を責める気持ち

(ii) 空欄 **Y** に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は **29**。

- ① ①では平中と恋人を怒りにまかせて追い出さだけの妻だが、②では浮気な夫に恥をかかせて世間の笑いものにするために策をめぐらす、悪賢い人間性が描かれている
- ② ①では平中の妻によって追い出される恋人に、②では平中の浮気に腹を立てて夫を問い詰める妻に焦点を当てることで、立場の違う女性のありようが描かれている
- ③ ①も②も平中の浮気に起因する出来事だが、②で妻の知恵によって夫の浮気がやむという結末にすることで、結局は元の鞘さやに収まるという夫婦の姿が描かれている
- ④ ①も②も妻には逆らえない気弱な平中ではあるが、②で妻の策略にはまってみつともない姿をさらすことで、単なる色好みではない、滑稽な人物像が描かれている

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 30。

- ① 鼻が赤いだけなら帝も参内を許してくれるだろうが、平中のように硯瓶の水で顔を拭って顔を黒くすると参内もできないのでやめてほしい
- ② 硯瓶の水で顔を拭ったので、平中のように顔全体が真っ黒になってしまったが、赤い鼻のままでいるよりは見苦しくないからよいだろう
- ③ 赤い色が鼻に付いているだけならまだ我慢できるだろうが、平中のように顔が黒くなると困るので硯瓶の水で顔を拭うのはやめてほしい
- ④ 鼻に赤い色が付いていると恥ずかしくて参内もできないので、平中のように硯瓶の水で顔を拭って誰なのかわからないようにしてほしい

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

sample

第5問

中国では縁起の良い奇数が並んだ九月九日を「重陽の節句」と言って、菊の花を酒に浮かべて飲み、邪気を払う習慣があった。そこで「十日の菊」と言えば、「時機を逸した用をなさないもの」の例えとして用いられるようになった。次の文章は、唐の鄭谷の【詩】「十日菊」とそれに関連する【資料】Ⅰ～Ⅲである。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

【詩】

十日_、菊

節_{（注1）}去_リ蜂_ハ愁_{フルモてふハ}蝶_レ不_レ知_ラ

曉_ニ庭_ニ還_{マタ}繞_{めぐル（注2）}折_{セル}残_ニ枝_ヲ

自_{おのづから}縁_ニ今_ニ日_、人_ノ心_ノ別_{ナルニ}

未_ダ必_{ズシモ}秋_ニ香_ニ一_ニ夜_{ニシテ}衰_ヘ

（『三体詩』による）

【資料】

I

曾子固亦云、詩当使人一覽、語尽而意有余。乃古人用
 心処。如詠『十日菊』是也。

II

山谷反以詠『十日菊』為病。在氣不長。因言、文章以氣為
 主。西漢文字所以雄深雅健者、其氣長故也。

III

「人之視菊直繫其時焉耳。当其時則重之。而非為其有
 所加。過其時則否之。而非為其有所損也。」

（【資料】Ⅰ、Ⅲは『歴代詩話』による）

(注)

- 1 節——重陽の節句。
- 2 折残——折れる。
- 3 曾子固——人名。曾鞏(二〇一九～一〇八三)のこと。
- 4 山谷——人名。黄庭堅(二〇四五～一一〇五)のこと。
- 5 気——個性。
- 6 西漢文字——前漢の文学作品。
- 7 雄深雅健——雄大で意味が深く上品で勢いがある。

問1 この【詩】の形式と押韻の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 形式は七言律詩であり、「枝」「衰」で押韻している。
 ② 形式は七言律詩であり、「知」「枝」「衰」で押韻している。
 ③ 形式は七言絶句であり、「枝」「衰」で押韻している。
 ④ 形式は七言絶句であり、「知」「枝」「衰」で押韻している。

問2 波線部(ア)「所以」・(イ)「直」のここでの読み方として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一

つずつ選べ。解答番号は 32・33。

(ア) 「所以」
32
 ④ ゆらい ③ いくばく ② ゆゑん ① いかなる

(イ) 「直」
33
 ④ また ③ ただ ② みな ① よく

問3

波線部①「反」・②「因」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 34・35。

(1)

34 「反」

- | | | | |
|-----|----|----|-----|
| ④ | ③ | ② | ① |
| だから | 実に | 逆に | いつも |

(2)

35 「因」

- | | | | |
|------|------|-----|-----|
| ④ | ③ | ② | ① |
| たとえば | そのまま | そこで | しかし |

問4 傍線部A「詩_レ当_レ使_二人一覽、語_レ尽而意有_レ余。」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 詩は、人に一たび読ませると、当然言葉をつくして表しさらに意味に余韻が生じるようにさせるべきである。
- ② 詩は、人に一たび読ませると、今にも言葉が終わっても意味に余情が漂うようになるものである。
- ③ 詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わっても意味に余韻が生じるようにさせるべきである。
- ④ 詩は、人に一たび読ませるに当たっては、言葉で表すよりも意味に余情が漂うようにさせるべきである。

問5 傍線部B「当_二其時則重_レ之。而非為_二其有所加_一。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 当_二其時則重_レ之。而非為_二其有所加_一。
其の時に当たれば則ち之を重んず。而も其の加はる所有るが為に非ず。
- ② 当_二其時則重_レ之。而非為_二其有所加_一。
其の時則ち重きに当たるが之なり。而も其の加はる所有るが為に非ず。
- ③ 当_二其時則重_レ之。而非為_二其有所加_一。
其の時に当たれば則ち之を重んず。而して其の有るが為に加はる所を非とす。
- ④ 当_二其時則重_レ之。而非為_二其有所加_一。
其の時則ち重きに当たるが之なり。而して其の有るが為に加はる所を非とす。

問6 【資料】Ⅰ・Ⅱにおける【詩】の評価についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解

答番号は 38。

- ① 曾鞏は肯定的に評価し、黄庭堅は否定的に評価しているが、「気が長じている」ことを重んじているのは黄庭堅だけである。
- ② 曾鞏は肯定的に評価し、黄庭堅も肯定的に評価しており、「気が長じている」ことを重んじている点も共通している。
- ③ 曾鞏は否定的に評価し、黄庭堅は肯定的に評価しているが、「気が長じている」ことを重んじているのは曾鞏だけである。
- ④ 曾鞏は否定的に評価し、黄庭堅も否定的に評価しており、「気が長じている」ことを重んじている点も共通している。

問7

【詩】

の鑑賞として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

39。

① 重陽の節句が過ぎてしまっても蜂や蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは決して一夜で衰えたわけではないと嘆いている。

② 重陽の節句が過ぎてしまっても蜂はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。

③ 重陽の節句が過ぎてしまっても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは決して一夜で衰えるはずがないと嘆いている。

④ 重陽の節句が過ぎてしまっても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。

(下
書
き
用
紙)

sample

2026
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

sample

第5回

第4問 古文

【出典】

【文章Ⅰ】

『古本説話集』

成立 平安時代末期～鎌倉時代初期

ジャンル 説話

編者 未詳

内容

上下二巻からなり、上巻には世俗説話が四十六話、下巻には仏教説話が二十四話収められている。また上巻では、和泉式部、清少納言、紀貫之、藤原公任など平安時代を代表する人々の和歌説話が多く並べられており、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』などの勅撰和歌集、『大鏡』『栄花物語』などの歴史物語、その他『大和物語』『枕草子』『和泉式部日記』など平安時代の有名出典と類話関係を持っている話が多い。下巻は、観音を中心とした利生、靈験譚が中心となっている。また、『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』などと共通の説話を多数含んでいる。

なお、本文は、新日本古典文学大系42『宇治拾遺物語 古本説話集』（三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注 岩波書店刊）によったが、問題文としての体裁を整えるために、表記を改めている。

【文章Ⅱ】

『源氏物語』

成立 平安時代中期

ジャンル 作り物語

作者 紫式部

内容

五十四帖からなる長編物語。主人公、光源氏の生涯を中心に、光源氏亡き後の子や孫に至るまでの七十年余りの出来事が綴られている。後世の文学や芸能に絶大な影響を与えた日本文学の最高峰と称されている作品である。

なお、本文は、新編日本古典文学全集20『源氏物語①』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 小学館刊）によったが、問題文としての体裁

を整えるために、表記を改めている。

〈問3で引用した文章〉

『源氏物語』

成立 平安時代末期

ジャンル 注釈書

作者 藤原伊行

内容

現存する最も古い『源氏物語』の注釈書。後の『源氏物語』の注釈書にも大きな影響を与えたとされている。

なお、本文は、源氏物語古注集成 第16巻『源氏釈』（渋谷栄一編纂 おうふう刊）によったが、問題文としての体裁を整えるために、表記を改めている。

【全文解釈】

【文章Ⅰ】

① 今となつては昔のことだが、平中という色好み（の男）が、たいそういとしく思う女で若く美しかった女を、妻の所に連れてきて（自分のもとに）置いた。妻が、憎らしい事々を言い続けるうちに、（女を）追い出した。（平中は）この妻に従つて、「女のこととは」とてもいじらしい」とは思うけれど、引きとめることができない。（妻が）荒々しく言つたので、（平中は女の）近くにさえも寄ることができないで、四尺の屏風に寄りかかつて立っていた。「私とあなたとの仲が思いがけないことであることよ。（これからあなたが）どのようにして過ごしなさんとしても、（私のことを）忘れないで手紙も寄越してください。私もそう（しようと）思うので」など（平中は女に）言った。この女は包みなどに物を入れ整理して、（人に）車を取りに行かせて待つ時である。「たいそうしみじみと悲しい」と思った。そうして（女は）出て行ってしまった。しばらくして（女が平中に）寄越した（歌は）、

（私のことを）忘れなさんな。（私はあなたのことを）忘れてしまふか、いや、忘れてしまわなかつた。春霞が今朝立つ中で、立ったまま（あなたが私に）約束したことを。

② この平中は、それほど強い関心を持っていない女の所でも、声に出して泣

【文章Ⅱ】

けないことを、うそ泣きをし、涙で（顔を）濡らすようなために、硯瓶に水を入れて紐をつけて、肘にかけて歩きまわっては、顔や、袖を濡らした。客間の方を、妻が、のぞいて見ると、（平中が）棚に物を置いたので、（平中が）出て（から）後、（妻がそれを）取り下ろして見ると、硯瓶である。また、畳紙に丁子が入っていた。（妻は）瓶の水を注ぎ捨てて、墨を濃くすって入れた。鼠の糞を集めて丁子と入れ替えた。そうしてもどのように置いた。いつものことであるので、（平中は）夕方（硯瓶と畳紙を持って、女の所に）出ていった。夜明け前に帰って、気分が悪そうに唾を吐き、横になった。「畳紙の（中に入れた）鼠の糞のせいであるようだ」と（思つて）妻は横になって聞いている。夜が明けて（平中が）見ると、袖に墨がひどく付いている。鏡を見ると、顔も真っ黒で、目だけきらきら光って、自分でもたいそう恐ろしい様子である。硯瓶を見ると、墨をすって入れてある。畳紙に鼠の糞が入っている。たいそうたいそう驚きあきれほど情けなくて、その後、（硯瓶の水を）うそ泣きの涙（として）付けることや、丁子を（口に）含むことを、やめてしまったということだ。

（姫君は）絵など描いて色を付けなさる。いろいろとおもしろく気の向くままに描き散らしなされた。源氏自身も描き添えなさる。髪がたいそう長い女を描きなされて、鼻に紅を付けて見なされると、絵に描いても見苦しい様子をしている。（源氏は）自分自身の御姿が鏡台に映っているのが、たいそう美しいのを見なされて、自分の手でこの紅を描き付け、赤く染めてご覧になると、このようにすばらしい顔でさえ、こうして（赤い鼻が顔の一部に）混じっているようなことは見苦しいに違ひなかった。姫君が、見たいそう笑いなさる。（源氏が）「私が、このように変な顔になったとしたらその時は、どうであろうか」とおっしゃると、（姫君は）「いやだろう」と言つて、そのようにも染み付くのだらうかと気がかりに思ひなされてる。（源氏は）拭き取るふりをして、「まったく白くならない。つまらない遊びごとであるなあ。帝におかれてはどのようにおっしゃるだらうか」と、たいそうまじめにおっしゃるので、（姫君は）たいそう気の毒だと思ひになつて、近寄つて拭きなされると、（源氏が）「平中のように色を付け加えなさるな。赤いような

のはまだ我慢しよう」と戯れなさる様子は、たいそう好ましい兄妹のように見えなさる。

〈問3で引用した文章〉

女君に、（源氏が）鼻に紅を付けて見せるところで、御硯の瓶の水で紙を濡らして拭ひなされて、平中のように色を付け加えなさるところ、

平中が契りを結ぶどの女にも（別れを惜しんで）泣く様子を見せようと思つて、硯の瓶に水を入れて目を濡らしたが、女は、察して、その瓶に墨を入れていたのを、（平中は）知らないでいつものように顔に付けて帰ったのを（女が）見て、

私には薄情な様子をあなたは見せるけれども、他の女の所には足繁く通つて、愛情のあることを示す別れを惜しむ涙を流していることが、墨が付いているあなたの顔の様子からわかることだよ。

【設問解説】

問1 語句解釈の問題

(ア)

形容詞

シク活用

「いみじ」

連用形ウ音便

形容詞

ク活用

「らうたし」

終止形

いみじう

らうたし

ポイントになる語は「いみじう」、「らうたし」である。

「いみじ」

- 1 はなはだしい。
- 2 すばらしい。立派である。優れている。
- 3 ひどい。情けない。恐ろしい。悲しい。

「らうたし」

1 かわいらしい。いじらしい。いとoshii。

「いみじう」は、直下の「らうたし」を修飾しているので、前記1の意で、①「たいそう」、②「とても」、④「ひどく」が該当する。「らうたし」の意味は、②「いじらしい」が該当する。よって②が正解である。

文脈を確認すると、平中が連れてきた女を、妻が追い出すが、平中は追い出される女のことを「とてもいじらしい」と思いながらも、引きとめることができない、というのである。よって②は文脈にも合っている。

(イ)

形容詞
ク活用
「心憂し」
連用形
心憂く
て

接続助詞

ポイントになる語は「心憂く」である。

「心憂し」

- 1 つらい。情けない。心苦しい。
- 2 いやだ。不快だ。

「心憂く」は、前記より③「情けなく」だけが該当する。よって③が正解である。

文脈を確認すると、硯瓶には墨が、畳紙には鼠の糞が入っていたことを平中が知って、たいそう驚きあきれほど「情けなくて」、その後はうそ泣きの涙として硯瓶の水を付いたり、口臭消しのために畳紙に入れた丁子を含んだりすることをやめた、というのである。よって③は文脈にも合っている。

(ウ)

副詞
係助詞
強意
動詞
ラ行変格活用
「あり」
未然形
「あり」
「む」
推量
助動詞
「む」
已然形
「め」

うたて
こそ
あら
め

ポイントになる語は「うたてあら」、「め」である。

「うたてあり」 「連語」

- 1 不快だ。いやだ。気味が悪い。

*副詞「うたて」にラ行変格活用動詞「あり」が接続したもの。

「む」

- 1 〈推量〉 くだろう。
- 2 〈意志〉 しよう。したい。
- 3 〈適当・勧誘〉 のがよい。てはどうか。
- 4 〈假定・婉曲〉 たら。ような。

*4は、「む+体言」、「む+助詞」、「む+」のような形で、「む」が連体形で文中に用いられる時。

「うたてあら」は、①「いやだ」だけが該当する。「め」は推量などの助動詞で、ここでは強意の係助詞「こそ」の結びになっている。直前の「かくかたはになりなむ時、いかならむ」を受けての返事であるから、ここの「め」は前記1の推量である。よって①が正解である。

文脈を確認すると、自分の鼻を紅花で赤くし、「こんな変な顔になったら、どうだろうか」と言う源氏に対し、姫君が「いやだろう」と言って、そのまま紅が染み付いてしまうのではないかと心配している、というのである。よって①は文脈にも合っている。

問2 語句と表現に関する説明の問題

a

動詞 ラ行四段活用 「忘る」 未然形 忘ら 忘れ	助動詞 尊敬 「る」 終止形 る なざる な	終助詞 禁止 な
---	--	----------------

「る」の識別

1 自発・受身・可能・尊敬の助動詞「る」の終止形

* 四段活用動詞・ナ行変格活用動詞・ラ行変格活用動詞の未然形に接続する。

* 「自発」は心情語や知覚動詞に付くことが多い。

* 「受身」は「〜に」などの、受身の対象が文中にあるか、補える。

* 「可能」は打消や反語表現を伴うことが多い。

* 「尊敬」は貴人の動作に用いられることが多い。

2 完了・存続の助動詞「り」の連体形

* 四段活用動詞の已然形（命令形）・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。

3 活用語の活用語尾や、活用語の一部

* 「る」を含めて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞などの活用語になる場合。

終助詞「な」

1 （禁止）〜な。〜てくれるな。

* 活用語の終止形（ラ変型活用語には連体形）に接続する。

2 （詠嘆）〜なあ。〜であるよ。

* 文末に接続する。

①が「な」は詠嘆の終助詞」とすることについて、その正誤を文法的には判断できない（後述）ので、内容から判断する。aは、直前に、

さて出でにけり。とばかりありておこせたる（Ⅱそうして女は出て行つてしまった。しばらくして女が平中に寄越した歌は）

とあるので、家を出て行った女が平中に寄越した和歌の初句であることがわかる。古語の「忘る」には四段活用と下二段活用があるが、ここでは「忘ら」という形なので、四段活用の未然形である。よって、その直後の「る」は前記「る」の識別の1となり、終止形なので、前記「終助詞「な」」の1か2かの判断は接続からはできない。内容を見ると、「忘らるな」の対象は、下の句の「けさ立ちながら契りつること」で、女が家を出る時に平中が屏風に寄りかかって立ったまま言った、「忘れで消息もし給へ。おのれもさなむ思ふに」という約束のことである。「忘れで」の「で」は打消の接続助詞、「消息もし給へ」の主体は、「給へ」が尊敬の補助動詞「給ふ」の命令形なので「あなた（Ⅱ女）」「さなむ」の「さ」は「消息をもし」のことである。よって、約束した内容は、「あなたは忘れないで手紙も寄越してください。私も手紙を書こうと思う」ということになる。女は、この約束を忘れず和歌を送ってきたのだから、aの「忘らるな」の主体は「あなた（Ⅱ平中）」ということになる。主体を「あなた」として「忘らる」の「る」の意味を考えると次のようになるが、

あなたは自然と約束を忘れる ↓「る」を自発とする場合

あなたは誰かに約束を忘れられる ↓「る」を受身とする場合

あなたは約束を忘れることができる ↓「る」を可能とする場合

これでは直前までの文脈と合わないのので、「る」を尊敬として「あなたは約束を忘れなざる」とすると、「忘らるな」の「な」の意味が詠嘆の終助詞として、「あなたは約束を忘れなざるのだなあ」とすると意味が通らない。「な」を禁止の終助詞として、「あなたは約束を忘れなざるな」と解釈しなければ、二句の「忘れやしめる（Ⅱ私は忘れてしまおうか、いや、忘れてしまわなかった）」につながらず、追い出された女が平中の約束を促すためにこの和歌を送った状況にも合わない。これによって、①は、「な」は詠嘆の終助詞」とする点は間違いないであり、内容の説明を「若い女が平中に捨てられた自分の身の上を嘆いている」としている点も明らかに間違っている。

b る。

名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	助動詞
量紙	の	物	の	故	断定
の		物		な	「なり」 連体形撥音便無表記
せい		である		めり	「めり」 終止形
				ようだ	助動詞 推定

「なり」
1 〈断定〉 ～である。
2 〈存在〉 ～にある。～にいる。
* 連体形・非活用語に接続する。
* 2は「場所＋なる＋体言」の形が多い。
* 伝聞推定の助動詞「なり」は終止形（ラ変型活用語には連体形）に接続する。

「めり」
1 〈推定〉 ～ようだ。～ように見える。
2 〈婉曲〉 ～ようだ。
* 活用語の終止形（ラ変型活用語には連体形）に接続する。
* ラ変型活用語の連体形に接続する場合、ラ変型活用語の語尾が撥音便化し、無表記になることが多い。
（例）あるめり↓あんめり↓あめり
* 視覚による推定。

②は「な」は推定の助動詞」とするのが文法的に誤りである。名詞「故」の下「なめり」は、「なめり」と分けても名詞の直下の「なめ」の説明がつかないので、ここでは「なめり」とするしかない。この場合、「めり」が推定の助動詞であることはすぐにわかるが、「な」をどう考えるかがポイントである。

ントである。前記のとおり、「めり」はラ変型活用語の連体形に接続する場合、直前のラ変型活用語の語尾が撥音便化し、無表記になることを踏まえると、「なるめり」が「なんめり」と撥音便化し、「なめり」と無表記になったものと考えることができる。この「な」を伝聞推定の助動詞とするならば前記「なり」の三つ目の*にあるように接続が合わない。名詞「故」の直下にあるので断定の助動詞である。前記のとおり「めり」は視覚によって推定する助動詞なので、「平中の苦しむ声^を聞いて、その原因を妻が推測する様子^を表している」という内容の説明も間違いである。

副詞	動詞	助動詞	助動詞
さて	ラ行四段活用	存続	婉曲
こうして	「混じる」	「り」	「む」
混じつ	已然形	未然形	連体形
	混じれ	ら	む
		ている	ようなこと

「らむ」の識別
1 現在推量の助動詞「らむ」
* 活用語の終止形（ラ変型活用語には連体形）に接続する。
2 完了・存続の助動詞「り」の未然形＋推量などの助動詞「む」
* 四段活用動詞の已然形（命令形）・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。
3 活用語の未然形活用語尾（その一部）「ら」＋推量などの助動詞「む」
* 未然形が「ら」で終わる語には、ラ行四段活用動詞・ラ行変格活用動詞（ラ変型活用語）・形容詞（形容詞型活用語）・形容動詞（形容動詞型活用語）などがある。

【設問解説】問1㉔ 参照。

③は「らむ」は現在推量の助動詞」とするのが文法的に誤りである。動詞としては、ラ行四段活用の「混じる」とザ行下二段活用の「混ぜ^ま」があるが、ザ行下二段の活用は「混ぜ・混ぜ・混ず・混ずれ・混ぜよ」で、cの「混じ」の形はない。ここは、「混じれ」で、ラ行四段活用動詞の已然形（命令形）である。よって、前記「らむ」の識別の2より、この「らむ」は完了・存続の助動詞「り」の未然形に推量などの助動詞「む」が接続したものであるとわかる。「む」は直下に助詞「は」があることから「假定・婉曲」である（問1ウ参照）。全体の意味は「こうして混じっているようなこと」となる。また、「源氏が今まさに赤い色の付いた自分の鼻を見ている」というのは、【文章Ⅱ】の「手づからこの紅花を描きつけ、にははして見給ふ」の部分に書かれているので、間違いとはいえない。

d

動詞	動詞	助動詞
ハ行四段活用	ハ行四段活用	存続
「思ふ」	「給ふ」	「り」
連用形	已然形	終止形
思ひ	給へ	り
思い	なさつ	ている

「給ふ」

- 1 「与ふ」の尊敬語 お与えになる。くださる。
 - 2 「尊敬の補助動詞」 ～なさる。
 - 3 「謙讓の補助動詞」 ～（ており）ます。
- * 1・2はハ行四段活用で、3はハ行下二段活用。

「り」

- 1 「完了」 ～た。 ～てしまう。 ～てしまった。
 - 2 「存続」 ～ている。 ～ていた。
- * 四段活用動詞の已然形（命令形）・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。

「敬意の方向」

- 1 「誰から」敬意を表しているか。
- ① 地の文……書き手（作者）から。
- ② 会話文……話し手から。
- * ①・②とも尊敬語・謙讓語・丁寧語の区別は関係ない。
- 2 「誰へ」敬意を表しているか。
- ① 尊敬語……動作の主体へ。
- * 「誰が」その動作を行っているかを考える。
- ② 謙讓語……動作の受け手へ。
- * 「誰に」その動作を行っているか、あるいは「誰を」相手にその動作を行っているかを考える。
- ③ 丁寧語……読み手（読者）・聞き手へ。
- * 地の文では読み手（読者）、会話文では聞き手へ。

④は「給へ」は下二段活用の謙讓の補助動詞」とするのが文法的に誤りである。「給へ」の直下の「り」は完了・存続の助動詞「り」の終止形であるので、四段活用動詞の已然形（命令形）かサ行変格活用動詞の未然形にしか接続しない。よって下二段活用には接続しないので、「給へ」は前記2のハ行四段活用の尊敬の補助動詞「給ふ」の已然形（命令形）である。敬意の対象を考えるためには、動作の主体を確認する必要がある。ここでは光源氏の鼻に付いた赤色が染み付くだろうと「あやふく思」うという動作の主体は姫君である。よって、前記「敬意の方向」より「給へ」は作者から姫君に対する敬意を表しているので、「源氏に対する敬意」というのも間違いである。

副詞

係助詞	動詞	助動詞
強意	マ行四段活用	打消
	「白む」	「ず」
さらに	未然形	已然形
まったく	白ま	ね
	白くなら	ない

「ね」の識別

- 1 打消の助動詞「ず」の已然形
 - *活用語の未然形に接続する。
- 2 完了の助動詞「ぬ」の命令形
 - *活用語の連用形に接続する。
- 3 ナ行変格活用動詞の命令形の活用語尾
 - *ナ行変格活用動詞は「死ぬ」「死ぬ(去ぬ)」の二語のみ。
- 4 ナ行下二段活用動詞「寝」の未然形・連用形
- 5 ナ行下二段活用動詞の未然形・連用形の活用語尾

⑨が正解である。前記の品詞分解より、「ね」は係助詞「こそ」を受けて已然形であることがわかる。よって前記「「ね」の識別」の1より、「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形である。発言の直前に「そら拭ひをして」とあるので、光源氏は嘘をついていることがわかる。その嘘を「さらに」打消(まったく「ない」と全面的に否定し、その上強意の係助詞「こそ」で意味を強めているので、鼻に付けた紅の色がまったく取れないということを「大げさに言った」ということも適切である。

問3 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の内容についての問題

授業で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について教師と生徒が話し合う場面が設定されている。それぞれの空欄に該当する本文の箇所を特定して読解し、その内容と選択肢とを吟味していく必要がある。

(i)

生徒Aが、『源氏釈』と【文章Ⅰ】の相違点として「我にこそ」の和歌の有無をあげ、「この和歌はどんな意味なのでしょう」と言っていることに對して、教師から「掛詞」に注目してみるとよいというヒントを与えられ、生徒Bが和歌の意味を述べているのが、空欄Xである。

この和歌は、『源氏釈』の説明によると、平中が契りを結んだ相手に、別れを惜しむ涙を流しているかのように見せるために硯瓶の中の水を顔に付けるのだが、それを知った女が、水の代わりに墨を入れた。平中はそれを知らずに墨を顔に付けて帰って来たのを見て詠んだ女の和歌である。この女は

【文章Ⅰ】から平中の妻である。和歌を解釈すると、次のようになる。

名詞	格助詞	係助詞	名詞	格助詞	名詞	係助詞	動詞	接続助詞
我	に	こそ	つらさ	を	君	は	みすれ	ども
私	に		薄情さ	を	あなた	は	見せる	けれども
名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	終助詞	
人	に	すみ	つき	顔	の	けしき	よ	
人	に	墨	付く	顔	の	様子	だよ	
		住み	着く					
名詞	格助詞	名詞	動詞	名詞	格助詞	名詞	終助詞	
			力行四段活用				詠嘆	
			「つく」					
			連体形					

「つらし」

- 1 薄情だ。冷淡だ。
- 2 苦痛だ。つらい。

「みす」

- 1 見せる。
- 2 結婚させる。

「住み着く」

- 1 定住する。住み慣れる。
- 2 夫が妻のもとへ続けて通うようになる。

「けしき」

- 1 様子。

「つらさ」は前記「つらし」の語幹に、「ゝ」の様子であること」の意を添える接尾語「さ」が付いた名詞である。ここではすぐ下の「君はみすれ」の目的語であるので、前記1が名詞化した「薄情さ」「冷淡さ」の意で、「みすれ」は前記1「見せる」の意である。よって上の句は、「私には薄情な様子をあなたは見せるけれども」の意となる。強意の係助詞「こそ」の係る「みすれ」は接続助詞「ども」に接続したために、結びは消滅しているが、「私には薄情な様子を見せる」ということを強調している。下の句の「すみつく」というのは、顔に墨を付けて帰って来た平中を見て詠んだのだから、「墨付く」と考えられる。「けしき」は前記より「様子」の意である。よって下の句は「人に墨付く顔の様子だよ」の意となる。全体的には「私には薄情な様子をあなたは見せるけれども、人に墨付く顔の様子だよ」となるが、これでは上の句と下の句がうまくつながっていない。このように訳がうまくつながらない時は、教師の言葉にもあるとおり、掛詞を考える必要がある。掛詞とは、同音異義を利用して一語、あるいは語の一部に二通りの意味を持たせる和歌の修辭法で、歌意がうまくつながらない部分に置かれている場合が多い。

上の句は意味が完結しているが、上の句と下の句がうまくつながらないので、下の句の中で掛詞を考えてみよう。上の句の「私には薄情な様子を見せる」から「ども」と逆接の関係でつなげるには、下の句の「人」は平中が契りを結んだ他の女、「に」はその女の居る場所を示す格助詞と考えると、「私には薄情であるのに、契りを結んだ他の女の所に続けて通って、その女には涙を流すふりをして愛情がある様子を見せる」という内容だと考えられる。よって「すみつく」には、「墨付く」の意と、前記のように、続けて通っているという意の「住み着く」が掛けられているとわかる。これらのことを踏まえて解釈すると次のようになる。

私には薄情な様子をあなたは見せるけれども、他の女の所には足繁く通って、愛情のあることを示す別れを惜しむ涙を流していることが、墨が付いているあなたの顔の様子からわかることだよ。

以上のことから、選択肢を検討してみる。

①は、「けしき」に「怪しき」と「気色」を掛けて」という説明が不適切である。下の句が「顔の様子が怪しいなあ」では歌意が通じない。

②が正解である。「すみつく」に「住み着く」と「墨付く」を掛けて」という説明や、「他の女の所に通っていることが墨の付いたあなたの顔でよくわかった」という掛詞を解釈した部分は、前述の内容に合っている。また、和歌の上の句や、帰って来て調子の悪そうな平中の様子を、自分の仕掛けたもののせいだと認識して横になったまま起きもしなかった妻の態度などから、「浮気な平中を嘲る」という表現も適切である。

③は、①と同様に、「けしき」に「異しき」と「気色」を掛けて」という説明が不適切である。また、妻は夫の心変わりを知って策略をめぐらし、夫の帰宅した様子から自分の策略が成功したことを確信したのであって、「帰宅した様子がいつもとまったく違っていたことで他の女に情を移した」と判断したわけではない。

④は、「すみつく」が掛詞になっているという指摘は適切だが、「澄み尽く」と「墨付く」を掛けて」という説明が不適切である。前述の和歌の説明のように、「人にすみつく」は他の女の所に通っているということであって、平中が「すました顔をしてい」ということではない。

(ii)

【文章1】の『古本説話集』①段落の内容は、『大和物語』と類話関係にあるが、②段落の内容が付け加えられていることで、【文章1】で描かれている内容がどのようになるのかを考える問題である。

①は、「平中と恋人を怒りにまかせて追い出す」というのが不適切である。平中の妻が追い出したのは、平中が愛する恋人だけである。また、「世間の笑いものにするために」という部分も適切ではない。本文中には、妻にこういう目的があったことは書かれていない。

②は全体的に不適切である。①段落は、平中とその妻、恋人のそれぞれの言動が描かれており、特に恋人に焦点を当てて描かれているわけではない。また、②では平中の浮気に腹を立てて夫を問い詰める」というのも不適切で、②段落に妻が平中を問い詰めている場面は描かれていない。

③は、「①も②も平中の浮気に起因する出来事だ」というのは適切であるが、②段落に「夫の浮気がやむという結末」については書かれていない。②段落の文末にあるように、平中がやめたのは「そら泣きの涙、丁子を含むこ

と」である。

④が正解である。「妻には逆らえない気弱な平中」というのは、①段落では「この妻に従ひて」とあるように、妻に逆らえず、「近くだにもえ寄らで」すなわち、恋人を追いつめ妻を止めることだけでなく、その上恋人の近くにさえも寄ることができなかったというところからわかる。②段落では、妻の策略にかかって、自分を情けなく思ってから以後、うそ泣きすることも丁子を口に含むこともやめたというところからわかる。色好み故に①段落のような事件が起こったのであるが、②段落で硯瓶の墨を顔に付けて、鼠の糞を口に含んだために気分が悪そうに唾を吐き、何も言わず横になるという平中の態度からは「単なる色好みではない、滑稽な人物像」が読み取れる。

(iii)

教師が提示した『源氏釈』の内容から、『源氏物語』の書かれた時には【文章Ⅰ】の②段落にある平中の逸話がすでに流布していたのだろう、ということがわかる。この『源氏釈』の文章を踏まえて、【文章Ⅱ】の「平中がやうに色どりに添へ給ふな。赤からむはあへなむ」とはどういうことなのか問われている。

まず、『源氏釈』の中で、「平中がやうに色どりに添へ給ふ」というのがどういふことなのかを説明している部分の解釈を考えてみる。

『源氏釈』の該当部分を検討する。

平中	平中	名詞	格助詞	動詞	名詞	格助詞	動詞	名詞	動詞
が	が			マ行上二段活用 「見る」			カ行四段活用 「泣く」		サ行上二段活用 「見す」
	見る			連体形	女こと		連体形		未然形
平中	契りを結ぶ				どの女		泣く		よし
が					にも		泣く		様子を
							泣く		見せ
									見せ

助動詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	格助詞	動詞	格助詞
意志									
「む」									
終止形	とて、	硯	の	瓶	に	水	を	入れ	て
よう	と	硯	の	瓶	に	水	を	入れ	て

名詞	格助詞	動詞	助動詞	格助詞	名詞	動詞	格助詞	名詞	格助詞
		サ行四段活用 「濡らす」	過去			サ行上二段活用 「心得」			
		連用形				連用形			
目	を	濡らし	ける	を	女	心得	て	そ	の
		連用形	連体形						
を		濡らし	ける	を	女	心得	て	そ	の
		連用形	連体形						

名詞	格助詞	名詞	格助詞	動詞	助動詞	助動詞	格助詞	動詞	格助詞
				ラ行下二段活用 「入る」	存続	過去		ラ行四段活用 「知る」	
瓶	に	墨	を	入れ	たり	ける	を	知ら	で
				連用形	連用形	連体形		未然形	
に		墨	を	入れ	たり	ける	を	知ら	で
				連用形	連用形	連体形		未然形	

名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	格助詞	動詞	格助詞	動詞	格助詞
						サ変格活用 「す」		ラ行四段活用 「帰る」	
例	の	やう	に	顔	に	し	て	帰	た
						連用形		連用形	
いつも	の	やう	に	顔	に	し	て	帰	た
						連用形		連用形	

【見る】

1 見る。

2 世話をする。

3 男女が契りを結ぶ。

【む】

【設問解説】 問1ウ 参照。

心得

- 1 理解する。納得する。
- 2 用心する。気を付ける。
- 3 心得がある。熟達する。
- 4 引き受ける。

「見る」は、平中が恋人の所に行った時の状況が書かれているので、前記3「男女が契りを結ぶ」の意で、「む」は、平中が涙を見せようと思ったのだから、前記2の「意志」となる。「心得」は、直前の「女」が主語で、この「女」は、【文章1】から妻のことを指していることがわかる。平中の妻は、平中が恋人の所で何をしていたかがわかっていて、ということであるから、前記1の「理解する」の意である。

以上のことから、わかりやすく解釈すると、次のようになる。

平中が契いを結ぶどの女にも別れを惜しんで泣く様子を見せようと思つて、硯瓶に水を入れて目を濡らし（うそ泣きの涙にし）ていたが、（そのことを）平中の妻はわかつていて、その硯瓶に（水の代わりに）墨を入れておいたのを、（平中が）知らないでいつものように顔に付けて帰った次に、生徒Eが内容を説明した【文章Ⅱ】の『源氏物語』の部分の解釈を検討する。

[illegible]

終助詞「な」

【設問解説】問2 a 参照。

「あへなむ」
「連語」

- 1 我慢しよう。やむをえないだろう。

*ハ行下二段活用動詞「敢ふ」の連用形に強意の助動詞「ぬ」の未然形、意志の助動詞「む」が接続したもの。

「あへなむ」は連語で、「我慢しよう」などと訳せる。このことから、源氏は鼻が赤くなったことを容認しているとわかる。よって「な」は、前記１の禁止の終助詞である。以上のことから、「平中のように色を加えなさるな。赤いようなのは我慢しよう」と解釈できる。では、平中のように色を加える、ということはどういうことか。『源氏釈』では、「御硯の瓶の水に紙を濡らして拭ひ給ひて、平中がやうに色どり添へ給ふ」とある部分に対応している。つまり、【文章Ⅰ】の、平中が硯瓶の水を付けることで顔が黒くなったという状況を踏まえて、硯瓶の水では平中と同じように黒い色を添えることになるので、それはやめてほしいと冗談を言ったのである。

（赤くなった鼻に、さらに）平中のように色を加え（て黒くし）なさるな。鼻が赤いようなのは（まだ）我慢しよう。

以上のことから、選択肢を検討してみる。

⑩は、「帝も参内を許してくれるだろう」というのが、「あへなむ」の解釈として不適切である。また、顔が黒くなると「参内もできないので」というのも、本文からは読み取れない内容である。

②は、「硯瓶の水で顔を拭った」という部分が不適切である。「顔全体が真っ黒になってしまった」ということも起こっていないし、顔が黒くなることについて「赤い鼻のままでいるよりは見苦しくないからよいだろう」というのもまったく逆の内容である。

③が正解である。「赤い色が鼻に付いているだけならまだ我慢できるだろう」というのが「赤からむはあへなむ」の内容である。また「平中のように顔が黒くなる」というのが「平中がやうに色どり添へ」の内容で、「硯瓶の

水で顔を拭うのはやめてほしい」というのが、源氏の鼻を拭おうとした姫君の行為を禁止したものである。

④は、全体的に不適切である。「恥ずかしくて参内もできない」というのが、「あへなむ」の解釈として不適切である。また「誰なのかがわからないようにしてほしい」というのも、本文からは読み取れない内容である。

第5問 漢文

【出典】

【詩】

鄭谷「十日菊」。鄭谷（八四二？～九一〇？）は晩唐の詩人。字は守愚、江西袁州（現在の宜春市）の人。光啓三年（八八七年）科挙に及第した。風景の描写や感情の表現に優れていたとされる。『三体詩』は、「さんたいし」または「さんていし」とも呼ばれ、全二十卷、『唐詩選』と並ぶ唐代の漢詩の選集として知られる。編者は、南宋の周弼。『三体』とは、漢詩の諸形式のうちの七言絶句・七言律詩・五言律詩の三形式を指す。『唐詩選』が、初唐・盛唐の詩を主として特に李白・杜甫の詩を多く載録しているのに対して、『三体詩』は、中唐と晩唐の詩を中心に載録していることに特色がある。「十日菊」は、『七言絶句』の部に載録されている。

【資料】

吳景旭『歴代詩話』。吳景旭（一六一一～没年未詳）は明末清初の詩人。字は又旦、または旦生、号は仁山。『歴代詩話』は八十卷からなり、『詩経』から明代の詩まで、旧説を集め、考証を加えた書物。本文は巻五十三「氣不長」から採った。

【本文解説】

【詩】

第一句・第二句

重陽の節句の翌日九月十日の早朝、蜂はまるで人のように悲しんでいるようだが、蝶はまったくそれに気づかない風情で、前日と同じように菊の周りを飛び回っているという光景を描写する。

第三句・第四句

重陽の節句が終わると、人は菊を愛でることをしなくなるが、菊の香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと述べる。菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、菊の香りそのものは必ずしも変わっていないと感慨を述べて、合理性を欠く人の心を嘆いている。

【資料】

I 曾子固は「詩は言葉で言い終えてさらに意味に余韻が生じるようにさせる

べきである。古人が注意を払ったところはまさにそこである」と言い、鄭谷の「十日菊」を例として挙げた。

Ⅱ 山谷は反対に鄭谷の「十日菊」は、個性が発揮されていないことに欠点があると考えた。「文章は個性を主とし、前漢の文学作品がすぐれている理由は著者の個性が発揮されているからである」と述べる。

Ⅲ 世間の人が菊をじっくり見るときは、ただ菊の盛りの時期だけだ。盛りの時期には、菊を珍重するが、盛りの時期を過ぎると敬遠する。しかし盛りの時期とその後で菊に何かが加わったり何かが減じたわけではない。

【資料】Ⅰと【資料】Ⅱは「十日菊」に対する作品評が述べられており、【資料】Ⅰは曾鞏、【資料】Ⅱは黄庭堅の評価である。曾鞏が肯定的に評価しているのに対して、黄庭堅は欠点として「気長ぜず」という点を挙げる。【資料】Ⅲは明代の詩人何孟春（一四七四～一五三六。字は子元、号は燕泉）による「十日菊」評の一部である。世の人々の菊の鑑賞の傾向を述べるが、菊自体は変わらないと述べる。

【書き下し文】

【詩】

十日の菊
節去り蜂は愁ふるも蝶は知らず
自ら今日の人心の別なるに縁る

曉庭に還た折残せる枝を繞る
未だ必ずしも秋香一夜にして衰へず

【資料】

Ⅰ 曾子固亦た云ふ、「詩は当に人をして一たび覽て、語尽くも意余り有らしむべし。乃ち古人の心を用ふる処なり。『十日の菊』を詠むがときは是なり」と。

Ⅱ 山谷反つて「十日の菊」を詠むを以て病ひは氣長ぜざるに在りと為す。因りて言ふ、「文章は氣を以て主と為す。西漢の文字の雄深雅健なる所以は、其の氣長するが故なり」と。

Ⅲ 「人の菊を視るや直だ其の時に繋るのみ。其の時に当たれば則ち之を重んず。而も其の加はる所有るが為に非ず。其の時を過ぐれば則ち之を否む。而も其の損する所有るが為に非ざるなり」と。

【全文解釈】

【詩】

十日の菊
（九月九日の）重陽の節句が過ぎてしまつて蜂はそれを悲しんでいるが蝶は気づかないで
明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りをまた飛び回っている
（菊の色香が九日と変わったように思えるのは）当然今日（九月十日）になると人の心が変わったからであり
菊の花の秋の香りは必ずしも一夜で衰えてしまったわけではない

【資料】

Ⅰ 曾子固はまた言う、「詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わつても意味に余韻が生じるようにさせるべきである。そして（それが）昔の（立派な）人が注意を払ったところである。（鄭谷が）『十日菊』を詠んだようなことがそれである」と。

Ⅱ 山谷は反対に（鄭谷が）「十日菊」を詠んだことについて欠点は個性が発揮されていないことにあると考えた。そこで言う、「文章は個性を主とする。前漢の文学作品が雄大で意味が深く上品で勢いがある理由は、その著者の個性が発揮されているからである」と。

Ⅲ 「世間の人が菊をじっくり見る時は、ただ菊の盛りの時期に関わっているだけだ。菊の盛りの時期になれば菊を珍重する。しかし菊に何か増えたものがあるためではない。その（菊の盛りの）時期を過ぎてしまつと敬遠する。しかし菊に何か減つたものがあるためではないのである」と。

【設問解説】

問1 詩の形式と押韻の問題

詩の形式については、近体詩である五言絶句・七言絶句、五言律詩・七言律詩の区別が問われることが多い。四句の詩であれば絶句であり、八句であれば律詩である。さらに一句内の字数が五字であれば五言と言い、七字であれば七言と言う。また古体詩である五言古詩・七言古詩の形式も覚えておく。入試漢文においては、おおむね四句・八句以外の詩であれば古詩であると理解しておいてよい。【詩】の「十日菊」は、四句からなる七言の詩である

るから七言絶句である。したがって、①・②「七言律詩」は不適當である。
押韻とは、おもに句末の文字の音の響きを揃えることであり、漢詩の場合は偶数句末の漢字音を揃えるのが大原則である。ただし七言絶句・七言律詩は、第一句末も押韻されることが多い。「十日菊」は七言絶句であるから、第一句末「知」(チ)・第二句末「枝」(シ)・第四句末「衰」(スイ)が押韻されている。よって、**正解は④**。

問2 語の読みの問題

(ア)「所以」は「所以——」の形で用いて、「ゆゑん」と読み、「——(する)理由・原因・方法・手段・もの・こと」という意味になる。①「いかなる」は「何如なる」、③「いくばく」は「幾何」、④「ゆらい」は「由来」である。よって、**正解は②**。

(イ)「直」は「直——耳」の形で用いられた時には、限定形の構文で「ただ——のみ」と読み、「ただ単に——だけだ」という意味になる。「耳」の直前にある「焉」は置き字である。「直」と同じ用法の語に「唯・惟・徒・但・特・只」があり、「耳」と同じ用法の語に「爾・已・而已・而已矣」がある。①「よく」は「能・善」、②「みな」は「皆」、④「また」は「亦・又・復」である。よって、**正解は③**。

問3 語の意味の問題

(1)「反」は副詞として「かへつて」と読み「反対に・逆に」という意味になる。また動詞として用いられる時には以下の用法がある。「はんす」と読むと「そむく・さからう」という意味になり、「かへる」と読むと「ひっくりかえる・もどってくる」という意味になり、「かへす」と読むと「うらがえす・くつがえす」という意味になる。波線部は送り仮名から副詞「かへつて」の用法である。①「いつも」という意味の語は「常・恒・毎」、④「だから」という意味の語は「故・因」である。よって、**正解は②**。

(2)「因」は副詞として「よりて」と読み「そこで・だから」という意味になる。名詞として「いん」と読み「由来・理由」などの意味になる。また動詞として「よる」と読み「よる・たよる」という意味になる。波線部は送り仮名から副詞「よりて」の用法である。①「しかし」という意味の語は

「然・然」③「そのまま」という意味の語は「遂」④「たとえば」という意味の語は「例」である。よって、**正解は②**。

問4 解釈の問題

再読文字「当」と、「使」を用いた使役形がポイントである。

使 ^ム ^{ラシテ} ^セ ^シ ^ニ ^ス	讀み	まさに——(す)べし
使 ^ム ^{ラシテ} ^セ ^シ ^ニ ^ス	讀み	当然——(する)べきだ・きつと——(する)はずだ
使 ^ム ^{ラシテ} ^セ ^シ ^ニ ^ス	讀み	Aをして——(せ)しむ
使 ^ム ^{ラシテ} ^セ ^シ ^ニ ^ス	讀み	Aに——させる

傍線部を書き下し文に改めると、「詩は当に人をして一たび覽て、語尽くるも意余り有らしむべし」となる。傍線部にある「当」は訓点(返り点と送り仮名)の施し方から再読文字の用法であり、「まさに——(す)べし」と読み、「当然——(する)べきだ・きつと——(する)はずだ」という意味である。④は「当」を「——にあたりては」と読み、「——に当たっては」と解釈しているため、不適當である。「当——」を、②は「今にも——ようになる」と解釈しているので不適當である。「今にも——ようになる」という訳になるのは、再読文字「將(一旦)——」である。

「使」を用いた使役形「使^ム ^{ラシテ} ^セ ^シ ^ニ ^ス」は、「Aをして——(せ)しむ」と読み、「Aに——させる」と訳す。②は前半の「読ませる」だけで、後半に「させる」を訳出しておらず、不適當である。重要単語「尽」は、他動詞として「つくす(出し切る)・自動詞として「つく(つきる・なくなる)」、副詞として「ことごとく(すべて)」と読む用法がある。傍線部の送り仮名「クル」は自動詞「つく」の連体形の活用語尾であり、「語尽」で「言葉がなくなる」と直訳できる。直後の「而意有余」と併せて考えると、「詩を朗読して鑑賞した後に余韻が残る」というように解釈できる。①「言葉をつくして」は、原文の「語尽」を「語を尽くす」と他動詞として解釈しており不適當である。②・③「言葉が終わって」が、「尽く」の解釈としては適當である。④は「尽」の解釈がなく、また「言葉で表すよりも」という比較表現

は、不適当である。よって、正解は③。

問5 返り点の付け方と書き下し文との組合せの問題

傍線部とその直後の二文が対照的な関係にあると捉えることがポイントである。傍線部「当其時則重之。而非為其有所加。」は、直後の二文と字数がほぼ同じであり、対応する語も対照的になっており、形式が揃えられていることに注目する。これは、表現の形式を揃えて意味の対照性を際立たせる、漢詩の対句表現に相当する技法である。傍線部直後の二つの文は「過二其時一則否之。而非為其有所損也。」とあり、書き下し文は「其の時を過れば則ち之を否む。而も其の損する所有るが為に非ざるなり。」となる。

当其時則重之。而非為其有所加。
過二其時一則否之。而非為其有所損也。

そこで、傍線部直後の二つの文と対照的であるような返り点の付け方と書き下し文の組合せを選ぶ。すなわち対句の形式に倣って返り点の付け方ができる限り一致し、対応する文字の品詞がほぼ一致するものを選ぶべき。よって、正解は①。

問6 内容説明の問題

【資料】Ⅰは、「曾子固」すなわち曾鞏の発言を引用する形式で、その「十日菊」評が述べられている。発言の冒頭部「詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わっても意味に余韻が生じるようにさせるべきである」という一文は、詩はどうあるべきかについての曾鞏の考えを示している(↓【設問解説】問4を参照)。曾鞏はそれを「古人」が注意を払い、鄭谷が「十日菊」を詠んだようなことがそれであるという。「古人」とは「昔の人」のことを言うが、漢文では「古人」や「古」の在り方が現状を評価する尺度や基準になることに注意する。つまり「古人・古」を主語とする叙述部分はすぐれていることを意味し、曾鞏は鄭谷の「十日菊」を、古人が心を用いた(Ⅱ注意を払った)ところを有しているとして肯定的に評価したのである。

【資料】Ⅱは、「山谷」すなわち黄庭堅の立場の紹介と、黄庭堅自身の発言の引用から成っている。したがって、ここに黄庭堅の「十日菊」評が述べられていると言えるだろう。黄庭堅の立場を、筆者は「山谷反以詠十日菊」

菊「為病在氣不長(山谷反つて「十日の菊」を詠むを以て病ひは氣長ぜざるに在りと為す)」と紹介している。これは「山谷は反対に(鄭谷が)『十日菊』を詠んだことについて欠点は『氣』が『長』じていないことにあった」と解釈できる。「病ひ(Ⅱ欠点)」を挙げているのであるから、黄庭堅の「十日菊」の評価は否定的であるとわかる。また「氣」について述べているのは、黄庭堅だけである。よって、正解は①。

問7 詩の鑑賞の問題

部分否定がポイントである。

読み	いまだかならずしも——(せ)ず
訳	必ずしも——(する)わけではない 必ずしも——(する)とは限らない

第一句「節去蜂愁。蝶不知」は、「重陽の節句が過ぎてしまつて蜂はそれを悲しんでいるが蝶は気づかないで」と解釈することができる。「重陽の節句(九月九日)」には、同じく庭園を飛ぶ蜂と蝶であるが、十日になると、蜂は「節句が過ぎてしまったことを」愁えて(飛ばない)が、蝶は「(節句が過ぎてしまったことを)知らない(ように前日と同じく暁の庭を繞る)」と対比的に描いている。①「蜂や蝶はまるでそれに気づかないように」は蜂と蝶を同等とみなして対比の関係を捉えておらず、不適当である。また、蜂は節句が過ぎたことに気づいたからこそ愁えたのであるから、②「蜂はまるでそれに気づかないように」は誤読であり、不適当である。

第四句「未必秋香一夜衰」(未必必ずしも秋香一夜にして衰へず)には、部分否定「未必——」(必ずしも——(する)わけではない)が用いられていることに注意して、「菊の花の秋の香りは必ずしも一夜で衰えてしまったわけではない」と解釈することができる。③「香りは決して一夜で衰えるはずがない」は「決して——ない」と全部否定の訳し方になっており、不適当である。④「重陽の節句が過ぎてしまつても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまつた菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わつてしまつ

たからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。」
は、蝶に焦点を当てて蜂に言及していないが、対比の関係を踏まえており、
「未^ダ必^ク——」⁽³⁾の訳も部分否定になっている。よって、正解は④。